

# 越中万葉の四季

## 9月21日(水)～11月7(月)

大伴家持が過ごした天平18年8月から天平勝宝3年8月までを中心において、歌に詠まれた越中万葉の四季を、当時の社会背景なども含めて幅広く紹介します。

### 越中の春(1月～3月)

#### 越中の四季

# 春

越中の春は、雪に閉ざされてきた冬のあとと開花の季節である。花々も一斉に芽吹き、やがて咲き始める。  
新年になっても、降る雪は多く、積雪四尺(約120cm)という年もあった。奈良の都で育った家持は、越中の自然の麗しさを感じることがあっただろう。しかし、家持はこの地の風物にまともに向き合い、丁寧に見つけ、新たに発見したさまざまな魅力を歌った。越中の自然の魅力のいくつかは、家持によって見いだされたと言える。

#### 1 家持と池主の桜に閉る前々歌

天平18年(746)の名から翌年の春にかけて、家持は大坂を離れ、長く隠居していた。病珠の家持を癒ましたのは、春の訪れを知らせる部下の大伴道主からの書翰や漢詩や歌であった。二年後、かつての風流なやり取りを思い出して、家持は、越前国にある池主に宛てて咲いた新の書翰を送った。池主の返書と、家持の返書が残されている。

山越に 咲ける桜を  
ただ一目に 君に見せては  
何をか思はむ

あしひきの 山桜花  
一目だに 君と見れば  
我恋ひあやも

桜花 今ぞ盛りと 人は言へど  
我はさぶしも 君と見れば  
いまだかふれり

あま 昔子が 古き垣内の 桜花  
一目見に 葉ね

いまだかふれり  
大伴家持 天平18年(746) 池主 返書

方葉集十九の巻には、家持の歌、天平勝宝2年(750)3月1日の夕暮れの歌から始まり、3日の上巳の節の歌までの15首が並んでいる。上巳の節には本宮に高で舞の羽を纏ったり、草木の芽が芽生えたりした。この日の朝には、は、(芽)、(舞)、(舞)かたかこなど、春の風物が多量に歌われる。越中の春は、ここに集まった。

春の風は 紅にはふ  
桃の花 下照る道に 曲で立つ娘子  
今日のみ心と  
思ひて憐めし  
あしひきの  
時の上の桜  
かく咲きにけり

ものこのふり  
八十娘子が  
還みまがふ  
幸井の上の  
咲香子の花



おおいらつめちゃん

「私が越中国のみなさんにはじめてご挨拶したのは、天平勝宝2年3月3日の、上巳の宴でした」

### 越中の夏(4月～6月)

#### 越中の四季

# 夏

家持にとって、夏は何よりもとぎすの季節であった。その鳴き声が聞こえてくる前に、期待する歌を多く詠んでいる。植物ではなでしこが女性のイメージとして特別の意味をもったようである。また、藤の花も布勢の水海の景勝とともに家持の心をとらえた。藤も楽しみとして詠まれている。夏は、家持の心が外へ向かって大きく開かれる季節であった。

#### 2 もっとも好んだ遊覧の地

家持は越中の自然に触れて、3つの歌を作っている。その一つ「藤の花水海に遊覧する歌」を天平18年(747)の4月24日(或)、天平勝宝2年(750)4月6日にも遊覧して長歌を作った(巻十九、4187)。平布の浦には置がたなびき、藤花に藤の花が咲き、浜は清く、春花の咲くときにも、秋の紅葉のときにも通って来たといふと、何れも花をめでた歌を詠んでいる。何れも詠れたお気に入りの景勝地であった。

藤花の 影なす海の  
底清み  
沈く石をも  
玉とぞ我が見る

全でしこが 花見ること  
娘らもが 笑まひのにはひ  
思はゆるい

明の花の 咲く月立ちぬ  
ほととぎす 米鳴もとまめよ  
ふかふたりと

さ夜ふけて  
暁月に 影見えて  
鳴くほととぎす 聞けばなつかし

大伴家持 天平18年(747) 藤花の歌



さきまろくん

「越中にこんな素晴らしい場所があると!! 本当にびっくりしました!」

# 越中の秋(7月~9月)

**越中の四季**

秋

万葉の時代、秋の植物としては萩が好まれてもっともよく歌に詠まれ、宴会の時などにわざとして頭に挿したりもした。行事としては七夕が盛んで、その日には宴会なども催された。

この季節の家持の楽しみは鷹狩であった。大切にしていた鷹が逃げ去ったときのがっかりした気持ちや、それが戻って来るとのお告げを夢に見た感激を長歌にしている。また、後には白い大鷹を手に入れ、それを日々世話する楽しみについても歌っている。

**1 セツ伝説**

セツ伝説とその冒険は中国から伝わり、広まっていた。宮廷で歌のテーマとされ、巻十には「セツ」と題して98首がまとまって収録されているのをはじめ、他の巻々にも見られる。萬葉の巻々では、7月7日に神楽の宴が催され、天平年間には宮中の行事にもなったという。

高千穂女をまつり、お所入をして、籠籠などの種々の手筈が巧みになるように願うつとつ葉、といふ行事があった。家持は、越中でも7月7日に次の川を渡り歩いて、一年に一度しか逢えない二人が逢えるのは今日であるとかう。

安の河い向ひ立ちて  
年の忍日長き千らが  
妻問ひの夜ぞ



**2 鷹狩**

家持は鷹狩を愛好し、三島野や石瀬野で狩をしたようである。「大鷹」という逃げた鷹は、精神でよく馴れたたといふ自慢の鷹であった(巻十七:4011~4015)。のちに白い大鷹を手に入れた大切に世話をした(巻十九:4154, 4155)。それらへの愛着を詠んだ長歌などから、鷹狩によく、大自然のなかで暮らした気持ちも知られ、心がのびのびとして種れやがたつてゆく家持の心遣いがよく見える。

三島野に  
矢形屋の鷹を手に携え  
月ぞ銚にける

二上の  
もてもこのもに  
潮さして  
我が待つ鷹を  
夢に上げつる

矢形屋の  
真白の鷹を  
やとに携え  
かき撫で見つ  
胸はくし良し

石瀬野に  
秋萩の露  
馬あめて  
初鳥狩だに  
せすや別れじ






「私が都にいる間に、家持さんが帰任することになりました! 越前国で池主さんの屋敷で会ったときは、本当にびっくりしましたよ!」

# 越中の冬(10~12月)

「家持さんとの越中国でのおつきあいは、とても短いものでした。でも、そのあと越前国にいましたので、心は通い合っていました。」



**越中の四季**

冬

天平勝宝元年(749)の暮、家持は「宴席に雪月梅花を詠む歌」を作っている。それ以前にも二つの景物を主題にして歌を詠むことはあったが、はじめて雪・月・梅花の三つの景物を同時に詠みこむといふ画期的な作品である。

また、天平勝宝3年(751)正月に「四尺」(約120cm)の雪が降ったことを吉事として、歌が詠まれている。雪は豊穡の予祝であった。

**1 雪国**

越中の冬は、その雪の多さにおいて、家持を驚かせたであろう。しかし、決してマイナスイメージではとらえず、むしろ、新年の望の夜でも大雪が降ったことをめでたいものとしている。「立山の麓」では、常夏に雪をいただく神々しさを歌う。このように、雪は神聖なものに連なり、豊作を暗示し、よい年を告げるものであった。

因幡国守の、「万葉集」最後の歌も、降り積もる雪に吉事が重なるようにと祈る家持の歌であった。

庭に降る  
雪は千重敷く  
しかのみに  
思ひて君を  
我が待たなくに

新しき、年の初めは  
いや年に、雪踏み平し  
常かくにもが

降る雪を  
腰になづみて  
参り来し  
験もあるか  
年の初めに



**2 雪の歌**

家持は雪の美しさを多様に表現している。雪のもつ清浄感をもとに月と花を結びこんで、「愛しき子」のイメージへとつないでゆく歌がある。また、真紅の山椒の実が白い雪に映える美しさを想像して詠んだ歌があり、山椒と雪の取り合わせに感興を覚えたのか、奈良の都へ帰ったからの天平勝宝元年(756)にも同題の歌(巻二十:4471)を詠んでいる。家持にとって、雪は美を極める契機としてもあったといえよう。

雪の上に  
照れる月夜に  
梅の花  
折りて贈らむ  
愛しき子もがも

この雪の  
消残る時に  
いざ行かな  
山橋の  
実の照るも見む

消残りの  
雪に合へ照る  
あしひきの  
山橋を  
つとに擠み来な





## 越中万葉の四季

会期:平成23年9月21日(水)~11月7日(月)  
会場:高岡市万葉歴史館回廊

高岡市万葉歴史館  
〒933-0116 高岡市伏木一宮 1-11-11  
TEL 0766-44-5511 FAX 0766-44-7335  
E-mail:manreki1@p1.tcnet.ne.jp  
URL http://www.manreki.com  
Twitter @manreki

